
泣きはらしたゴーレムに

遙秋都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣きはらしたゴーレムに

【Nコード】

N7471W

【作者名】

遙秋都

【あらすじ】

少女が目を覚ますと、目の前には男性がひとり。

少女は記憶も知識もなく、そこがどこなのかもわからない。

「おはよう、レイシア」

男は少女の名を呼ぶ。

「おはようございます。あなたは、だあれ？」

少女は男の名を知らない。

ゴーレムを作る男と、少女のかたちをしたゴーレムの物語。

昨日の夜、何かをやり残したような気がして目を開けた。

夢だったのか、その感覚は現実感で塗り潰される。目に見えたのは曖昧な記憶ではなく、自分を見下ろしている男の顔だった。

「やあ、おはよう」

声をかけられたのは、ベッドに行儀よく寝そべる少女だ。可憐な、と言って差し支えない整った顔立ちは、少し人間離れしている。

「……」

少女は声を出そうとして、うまくできないことに気がついた。喉に栓がされているようで、背中 of 辺りがむずむずする。

「無理しなくていい。ゆっくり。ほら、水でも飲んで」

ベッドの脇に立っていた男は、側の小さな机から水差しを取り上げると、逆さまになっていたコップに注ぎ込んだ。

寝たまま、少女は部屋を見る。小ぢんまりとした木造の部屋で、ベッドの他はクローゼットと本棚、そして男が腰かけている椅子しかない。水差しが置いてあった机は、よく見たら小さなタンスだった。

「ほら」

少女は男に促されるままコップを受け取り、口をつけた。冷たい水を飲み込んで初めて、ひどく喉が乾いていたことに気づく。

結局、コップ一杯の水を一口で飲み切ってしまった。

「まだ飲むかい？」

コップを返しながら、少女は首を横に振る。

「大丈夫」

「そうか。それじゃあ改めて」

男は水差しに蓋するように、コップを逆さまに乗せた。それからこりと笑みを見せる。

「おはよう、レイシア」

「おはようございます。……あなたは、だあれ？」
少女は首を傾げた。

男は言った。

「私はラウリス。君の父親だ。でも厳密に言うと父親じゃない。もつと言えば、血の繋がりが無い。ゴーレム、と言ってわかるかな？」
少女には何のことかわからなかった。素直にかぶりを振った。格好はパジャマのままだが、今の少女は体を起こして椅子に座っている。さらに両手でマグカップを抱えて、一心に中のコーンポタージユを冷ましていた。

「そうか。ゴーレムというのは一種の人形でね。マナという特殊な力で動く魔法の生き物だ。そして、私はゴーレムを作る仕事をしている」

一口分、こくりとコーンを飲み込んで、少女はラウリスに目を向けた。

「わたしが、その？」

「そう、ゴーレムだ。もともとゴーレムというのは伝説に出てくる魔法人形なんだ。あらゆる命令を聞く万能の小間使い……と言ってわかるかな」

「なんとなく。わたしは小間使いなの？」

「現実のゴーレムは万能には程遠い。でも、現実でも小間使いのように使われる場合が多いね。貴族の間では、高性能な、つまり高価なゴーレムを連れて歩くのがステータスになってるくらいだ。でも、君はそういうのとは違う」

少女は頭を横に傾けて、話の続きを促した。口がコーンポタージユで塞がっていたからだ。

「君の名前はレイシア。私がつって、ついさっき目を覚ました新型ゴーレムだ」

「……………新型ゴーレム？」

ラウリスは微笑んだ。少女を見ると、彼は必ず微笑んでいた。

「今、この国で作られているゴーレムはね、ある程度の知識や能力をもって生まれるんだ。すぐに小間使いとして働けるようにね。でも君は違う。体は、およそ十四歳ほどの性能だけど、中身はもう少し幼い。最低限の知識しか与えていないからね」

「わたしはだめなゴーレムなの？」

「逆だよ。今は少し知識が乏しい代わりに、レイシア、君には知恵がある。あらゆることを吸収して成長する柔軟な力だ。まるで、人間のようだね」

少女はマグカップを置いた。中のポタージュを飲み干したのだ。手を膝に乗せて、きゅつと握る。

「だからわたしは、何もわからないのね。ここがどこで、あなたが…… ラウリスがわたしの何なのかも、覚えてなかった」

「大丈夫だよ。ここは私の家で、つまり君の家だ。そして私は、君の父親のようなものだ」

「のようなもの？」

「私は君を作っただけだからね。血が繋がっているわけじゃない」
「でも」

少女は一度うつむいた。気持ちがあまく言葉にならなかったのだ。それでもなぜか、まるで喉に蓋がされていた時のようにむずむずして、落ち着かない。

「でも……のようなものなら、もう、そのものみたいなものでしょ？」
「？」

「え？」

「ラウリス」

「なんだい、レイシア」

少女は顔を上げて、ラウリスを正面から見つめた。やはり彼は微笑んで、まるで愛娘を見つめるような優しい目を見せていた。

だからたぶん、間違えてないと、少女は思った。

「お父さん、って呼んでもいい？」

ベージュの靴下が無造作に置かれていた。というよりは、ずさんに放り投げられて、床にくたりと着地したように見えた。

細い指先でそれをつまみ上げて、腕に抱えていたカゴに放り込む。

「もう、お父さん！」

少女は　レイシアは顔を上げて声を張り上げる。そう大きな家でもないので、相手に聞こえていないはずがない。

しかし返事はなく、レイシアは寄せていた眉の間に、さらに深いシワを作った。我知らず唇を尖らせて、もう一度声を出す。

「お父さん！　靴下を裏返して脱がないで、って言ったでしょー？」

寝室に放り捨てられていた靴下やシャツをすべてカゴに入れると、レイシアは部屋を出た。丁度、廊下を歩いてくるラウリスが見える。

「やあ、ごめんよ。ついうっかり」

「もう。今度こそ、気をつけてよ？」

「同じ間違いを何度もするのは愚か者だけだよ」

「お父さん、同じ間違い何度目？　もうわたし、数えるのもやめちゃったよ」

「つまり私は愚か者だから、そうそう治らないってことだね」

「開き直らないの！」

「あはは、ごめんごめん。　持つよ」

ラウリスがレイシアの抱えていたカゴを持ち上げる。そのまま踵を返して、並んで歩き出す。

「ありがとう、お父さん」

「なーに、大体私の洗濯物だしね」

小さな家の洗面所に向かうと、小さな洗濯機がある。これの開発にも関わった、とラウリスは豪語していた。付属の乾燥機能を使うと衣類が四つに裂けて出てくるため、現在は洗う機能だけが活用されている。

「力加減が難しいんだよなあ」

洗濯槽の上でカゴを逆さまにしながら、ぼやくように父が言った。
「シルクにコットン、レザーにウールにカシミアにビロードに合成繊維。同じ力加減で絞れば必ず裂ける。とは言え、ひとつひとつにボタンをつけて調節していたら、洗濯で日が暮れる」

「わたしの提案は？」

娘の言葉に、口をへの字に曲げる。

「火あぶりかい？ ガスがもつたいたないし、事故率が無視できないからなあ」

問題はあつても、洗濯機はそれなりに便利だ。衣服を入れて水を注ぎ、洗剤を入れてボタンを押す。すると排水が終わる頃には、びちよびちよではあるが清潔な服になる。

ボタンを押して洗濯機を回す頃になつても乾燥装置の代案は見つからなかったので、その話はそれまでになった。

ふたりで居間に戻る。この家で一番広い部屋で、ラウリスの私室と応接室と執務室と食堂を兼ねている。その雑多な用途の割に片づいているのは、レイシアの努力の賜物だった。

「うーん」

季節は初冬。これもラウリスが開発に関わつたらしい、コタツというテーブルに入り込むと、その開発者は気難しげな声を漏らした。
「どうしたの？」

レイシアは居間に併設されている台所にいた。深皿をふたつ並べて、コンロの上から小さな鍋を取り上げる。

「そろそろレイシアも、外を知る頃かと思つてね」

鍋の蓋を取ると、中に野菜のスープがたっぷり入っている。レイシアはそれを深皿に移して、コタツに運んだ。

「ありがとう」

「どういたしまして。外つて？」

聞きながら、レイシアはコタツの毛布をめくって足を入れる。

コタツというのは、テーブルの上に毛布を二枚重ね、上に天板を

置いて抑えているものだ。テーブル本体の天板には、裏側にマナ燃焼装置がついていて、中が暖かい。ラウリスの発明の中で、ゴームより役に立つものだとレイシアは思っている。

「外は外だよ。家の外、まだ出たことないだろう？」

「庭の手入れはいつもしてるもん」

「それだって家の敷地内だ。もつと離れて、街を見てもいい頃かもしれない。もう目覚めて、一月も経つしね」

レイシアは深皿の冷たいスープを見下ろした。ニンジン、ジャガイモ、レタス……これらの食材を買ってくるのは、いつもラウリスの役だった。

「わたしが買い物したり？」

「そうそう。最初は買い物くらいがいいかもしれないな」

「まだ零歳一箇月なの？」

「誰もそうは思わないさ」

「ちよつと不安」

料理も洗濯も、それほど難しくはなかった。たぶん買い物も、できないということはないだろう。でも不安なのだ。理屈ではない。

ラウリスは頷いて、娘に笑いかけた。

「それなら私と一緒に行こう。慣れたら、ひとりで出歩く練習をすればいい」

レイシアはスープから目を離して、向かい側に座る父を見る。漠然と感じていた不安が、霧が晴れるように消えていく。

「うん……。わかった。それなら、すつごく楽しみ！」

レイシアはにこりと笑った。

声をかけられたのが自分かどうか、咄嗟にわからなかった。それでもレイシアは足を止めた。

振り向くと、間違いなく自分を見ている視線と目が合う。好奇の目。面白がるような表情で、少年がレイシアを見据えていた。

「わたし？」

そう、と少年は頷く。

「君はゴーレムだね」

「うん、そうだよ」

肯定してはみたものの、レイシアは目の前の少年が何者なのかわからなかった。人間なのかゴーレムなのかすら判別がつかない。見た目は、レイシア自身よりも、いくつか歳上だろう。

彼は何の脈絡もなく話しかけて来た。レイシアは買い物かごを持って、街の変哲ない通りを歩いていただけだ。

「幼いゴーレムのようだ」

「生まれてまだ一箇月半なの」

「なぜひとりで外を歩いてるんだい」

「お買い物に行くところなのよ」

「ひとりで？」

「最初はお父さんと一緒だったけど、もう慣れたもん。もう三度もひとりで来てるのよ」

「なるほどね。でも気をつけて、家の外には心ない人だっているんだ」

レイシアは頭を傾けた。考え事をする時と、疑問が浮かんだ時に首を傾げるのは、彼女の癖だ。

大きな目で、少しだけ上にある少年の顔を見る。

「ありがとう。ねえ、あなたもしかしてゴーレムなの？」

「へえ、正解。でも、どうしてそう思った？」

あつさり少年は頷く。少女は少し考えた。

「うーん……今まで、わたしをゴーレムだと思った人はいなかったの。もちろん、お父さんは別よ。でもお肉屋さんでも、八百屋さんでも、誰も。だからもしかしたら、わたしをゴーレムだとわかるのは人間じゃないんじゃないかって」

「面白い考え方だね。でも別に、ゴーレムだから人間とゴーレムの区別がつくわけじゃない。たまたま僕はゴーレムだけどね」

「そうなんだ。そういえばわたしも、人間とゴーレムの区別つかないんだった」

「実は、大抵のゴーレムは見ればわかるよ。あまり元気な目をしていないし、人間のように表情豊かじゃない。中には首輪をつけられているものもいる」

「首輪？」

レイシアは驚いて目を見開いた。父は自分に首輪をつけようとしたことはない。街で見た首輪をしている生き物と言えば、ペットの犬くらいだ。

「そう。ペット扱い。ゴーレムには様々な用途があるんだ。君のように家政婦に勤しむものもいれば」

「わたし家政婦じゃないわ」

「そう？　じゃあ君のお父さんの娘なんだね。それは幸せなことだ」「家政婦のゴーレムもいるの？」

「それだけじゃない。観賞用、奴隷、ゴーレム闘技というのものもある」「闘技？」

「ゴーレム同士を闘わせて遊ぶのさ」

「そんな」

「そういうものなんだよ。だから君は恵まれている」

「……あなたは？」

レイシアは急に不安を覚えて、訊きながら一歩距離をおいた。目の前の少年が「心ない人」ではない確証などない。

「まだ名乗ってなかったね。僕はイシユド。超高性能ゴーレムだよ」

少年は、どこか誇らしげに言う。

「超高性能？」

「そう。空を飛べる」

「えっ！ ほ、本当に？」

「目からビームも出る」

「ええ！ それは……大丈夫なの？ まぶしくないの？」

「大丈夫。この眼球がぐるりと回ってね、反対側から出るんだ」

「うわ……ちょっと怖いね」

「と、こんな具合に嘘をつけるくらいは高性能なのさ」

「えー」

レイシアは盛大に肩を落とした。ビームはともかく、空を飛べるのは素敵だと思ったのだ。

レイシアの恨みがましい視線は軽く受け流して、イシュドはわざとらしく肩をすくめて見せた。

「僕は政府で働いてるんだ。王宮の偉い人が主人でね、他のゴーレムに比べればかなりの自由をもらってる。こうして街中をぶらついて、女の子に声をかけるくらいね」

「そんなことしてるの？」

「レイシアのことだよ」

「あ、そっか」

「それにしても、君もかなりの高性能だね。まるで人間のように生き生きしてるよ」

そうかなあ、とレイシアは首を傾げる。

「買い物はできるようになったけど、まだまだだよ。料理は上手じゃないし、掃除も洗濯も時間がかかって……」

「君は家政婦じゃないんだろ？」

「そうだけど、家事はするもの」

「本当に家族なんだね。いいお父さんをもったみたいだ」

「変なお父さんなんだよ。中途半端に役に立つ発明品を作る天才なの。ゴーレムを作るのが本業だーって、本人は言ってるけど」

「ゴーレムを？ お父さんの名前は？」

「ラウリス」

イシュドは驚きに目を瞠った。

「ラウリス博士か！ 高名な方だよ……近代ゴーレムの父だと言われているくらいだ」

「お父さんが？ 人違いじゃないかなあ……。のんびりしてる変な人よ」

レイシアの脳裏に浮かぶのは、自分の発明品であるコタツに首から下をもぐりこませて、幸せそうに目をつむる父の顔だった。間違っても偉大な人物ではない。

「僕は会ったことがないから人格は知らないけど……。そうか。それなら君のようなゴーレムも納得できるよ」

「わたしのようなゴーレムって？」

「新しいことを覚えるゴーレムさ。使命のためではなく、生きるために生きるゴーレム。僕も、君もね」

「生きるために……。あつ。わたし、そろそろ買い物に行かなくちゃ！ ご飯食べないと、生きていけないもの」

イシュドは微笑みを浮かべて首肯した。

「そうだね。気をつけて行くんだよ」

「ありがとう。あ、ねえ、イシュド」

「うん？」

「わたしとあなたって、友達？」

「……。ああ。そうだね。同じ街に住んで、名乗りあって、お話をしたんだから。僕たちは友達だ。光栄だよ」

そっか、と頷いたレイシアは嬉しそうに笑顔を見せた。少女の胸の奥で、心臓が あるかどうかは、父に聞かねばわからないが

強く、一度跳ねる。

「へへ。それじゃまたね、イシュド！」

言ってみたかったのだ。「またね」と、誰かに。父とは違う、誰か他人と距離を近づけてみたかった。だからイシュドがまるで父の

ように、見守るような優しい笑みで頷いてくれて、レイシアは嬉しかった。

「ああ、またね。レイシア」

初めてできたゴーレムの友達は、買い物カゴを提げるゴーレムを、優しく見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7471w/>

泣きはらしたゴーレムに

2011年9月17日03時29分発行